

三年の抑留中、多くのソ連人を知った中に、最初の山から最後のキルガまでいたあばたのコールケンという兵士がいた。最初は悪の代表みたいな男であったが、キルガで別れるときは大変よくしてくれた。別れを惜しんで涙さえ浮べたのは彼にも人の情けがあつたのだろう。

終戦と同時に帰国しておれば、こんな悲劇もなかったものを……と想いつつ

一日十円の賃金で塩を

山梨県 中山 嘉明

北朝鮮で終戦を迎えた私は、戦後平壤郊外の三合里収容所に収容された。そしてここに収容された者の多くは後にシベリアへ送られることになったが、私の場合は豆満江を渡って旧満州へ連行された。

満州へ連行される前、三合里ではソ連軍の女軍医の診察を受け、疥せんということで幕舎に設けられた患

者収容所に入院していた。昭和二十一年の四月の初めころ、夜中に入院患者は日本に送還するという命令が伝達された。そして三百人が収容所の門から平壤駅へと向かった。

平壤駅から有蓋貨車に乗り込み、夜中に発車。夜が明けてみると、列車は平元線を走っていた。そしてやがて高原駅に着いた。ここから右へ回れば元山方面へ行く。そして元山から乗船して新潟港上陸かとも思ったが、予想を裏切って汽車は左へ折れた。そして咸興、興南と停車したが下車の命令は出ない。ついにそのまま北上して清津で停車した。

清津では埠頭に入って乗船するのかと思ったが、これも期待はずれで咸鏡線を北上し始めた。

北鮮の橋梁、道路は到るところが破壊されていた。列車はさらに北上し、図們江（豆満江）が見えてきた。間もなく鉄橋を渡って図們に入った。いよいよ満州入りだ。ここまで来ても内地に帰るところか、どこまで連れて行かれるのか皆見当もつかない。まるでまな板のコイのようにすべてをあきらめてしまい、汽車がど

こを走っているのか、停車駅がどこなのか確かめるのも億劫なほど精も魂も尽き果てて、真つ暗な貨車の中でだれも口をきく者はいなかった。大地の冷たさが鉄路から車輪に、車輪から貨車の床に伝わって、座っている下半身が凍るようだった。小刻みに体をふるわせて、寒さから少しでも逃れようとした。寒気はいや応なく腰から背中の上り、やがて後頭部に疼痛のように刺激を与えた。耐えられなくなった兵隊は立ち上がって足踏みを始める者もいた。

やがて延吉に到着。全員下車の命令が出た。プラットフォームに整列させられるところになってようやく夜が明け、ソ連兵が数人やってきて人員点呼をしたが、三合里を出発する際の員数と合わなかった。途中数人の脱走者が出たのだろう。

駅を後に長い列をつくって歩き出し、延吉の街に入った。街を過ぎて丘陵にかかると、はるか彼方に赤れんがと白い建物が見えてきた。隊列はそれに向かって真つ直ぐに進んだ。ソ連兵の警戒は一層厳重になり、時たま威嚇のため自動小銃を空に向けて発砲した。

収容所の建物は三合里と同じバラックづくりで、周囲には鉄条網が張りめぐらされている。入り口ではソ連の歩哨が門を開けて待っており、私たちが入ると再び門は閉められた。

一夜開けてソ連の軍医が身体検査を行った。その結果、半数以上の者が延吉国際病院に入院した。この病院は旧陸軍病院で赤れんがの建物であった。この生活も給与が悪く、一日二回の食事はアワとコウリャンのかゆであつた。また以前からこの収容所にいた日本兵たちは服装も悪く、黒光りするような汚れた軍服をまとい、軍靴は紐さえないありさまであつた。また、殊のほかシラミも多く、発疹チフスや疥せんにかかる者も多数にのぼつた。栄養失調の患者も次第にふえていった。病院といつても薬も思うにまかせず、毎日のように死人が続出した。そして私たちが毎日やられる使役は死人を埋めるための穴掘りであつた。それも初めのころは衣服を着せたまま埋葬したが、後には衣服を脱がせて埋めた。一晩のうちに何回か用便に起きるのが常であつたが、隣に寝ている戦友が用便もせず

よく眠っているなあと思っていると、朝方には冷たい骸（むくろ）となっていた。

一日に二度与えられる食事、飯盒の中ぶたに半分のアワの雑炊では、体力を維持していることもできない。食事の入れてあった桶を洗に行つたとき、その桶の最初の洗いを飲んだりして、少しでも腹の中に入れてよとした。そのあさましさは見るも哀れであった。

同じ使役に出るにしても、若い元氣のある兵隊は收容所の外へ出る使役を望んだ。そうすれば外ではチェンピンやポーミパンが少しでも口に入る機会があるからだ。時にはソ連兵の黒パンを分けてもらつたり、スーブも彼らが残したものをわれ先にと吸い合つたりした。

延吉の收容所で一番困つたことは紙のなかつたことである。用便のあと、ノートの紙を一枚ずつ使い、手帳もやぶり終わり、後にはふんどしを前から破いたが、最後には縄を使うありさまであった。

また野菜が極端に不足し、一か月もたたないうちにビタミンCの欠乏をきたし、目が見えなくなる者、歩

行が困難になる者が始めた。アカザの草を採りに外柵に近寄ると、ソ連の監視兵が自動小銃で撃つので危険だ。そこで時たま街へ使役に出た折に野菜類を調達してきた。その金は衣類や帯革を売つて得たものだった。

満州では塩が貴重品であり、街の店先にはザルに入つた岩塩が散見された。五月になつてからソ連兵が引き揚げ、八路軍に引き継がれたが、この八路軍の使役に出ると、一日十円の賃金がもらえたので、この金でひと握りの岩塩を買つた。塩気がなければ食物はのどを通らない。塩が手に入らないときは、少しでも塩分をとろうと、汗をなめながら食事をしたこともある。毎日食べることしか考えていないので、戦友との話は食べ物のことばかりであった。